

## 実習1 生活の質を上げる工夫を学ぶ（疑似体験歩行訓練含む）

前大島眼科病院 山田 敏夫

近年、視能訓練士に求められる業務も拡大し、その中でロービジョン児・者へのロービジョンケアを専門に行っている眼科も増加してきている。これからの視能訓練士は、視機能の評価・訓練のみならず、ロービジョンに対する教育や生活など社会との関連性についても十分な知識が必要となってきた。このようなことから実習1の目的として、次の2点を挙げた。

- ① ロービジョンの疑似体験を通してロービジョン児・者の読みや書き、食事、買い物、歩行など、学習・日常生活の動作を想定した不自由さ、不便さを学ぶ。
- ② 視能訓練士としてどのようにしたら、ロービジョン児・者の生活の質を上げられるか、その工夫を考える。

実習を始めるに当たり、眼を閉じてロービジョンを想定した日常生活での不自由さ、不便さを考えさせた。次にアイマスクや疑似体験用シミュレーション眼鏡（視力障がい・視野障がい）を装着して会場内、廊下を独歩および手引きによる方法で歩行体験をした。また席の横同士2名を1グループとして、シミュレーション眼鏡を装着して、折り紙、書字、読字などの実習とともに視覚補助具や拡大鏡の使用法についても実習した。点字では日本語の50音やアルファベットの解説表を配布して概略を説明した後、実際に点訳しておいた問題用紙をグループに配布し、触読にて答えてもらった（答：HOPE 希望）。その他の文字についても体験学習を行った。さらに日常生活を想定した食事では、料理の内容に合わせたランチョンマット色の選び方、箸・さじ・フォークの色、食事素材の視認性の確認）などでの工夫を考えさせた。買い物などでは硬貨の弁別法（1円、穴なし5円、穴あき5円、ギザ付10円、ギザなし10円、穴なし50円、穴あき50円、100円、500円）や紙幣の弁別法（1,000円、ホログラム2種類の5,000円、10,000円）なども体験した。

最後に相談事例を2例挙げ、視能訓練士としてどのようにしたら、生活の質を上げられるか、その工夫を考えさせた。

- ① 急激な視力低下で今までのように家事ができなくなった女性。
- ② 視野障害で家庭の中でも生活がし辛くなった50代男性。

まとめとしてグループごとに疑似体験の感想を述べてもらい実習1は終了した。